神並遺跡第12次発掘調査概報

1988

財団法人　東大阪市文化財協会

はしがき

東大阪市内には数多くの遺跡があり、私達の祖先の人達が生活し営々と築き上げてきた文化の足跡が地下に埋もれています。近年、土木、建築工事が増加しており、年間500件を越える届出があります。大規模な開発事業に先だって実施される埋蔵文化財確認のための試掘調査により、新たに発見される遺跡もあります。

神並遺跡も、大阪と奈良を結ぶ都市高速鉄道（現在の近鉄東大阪線）の建設に先だつ事前調査により昭和56年に発見されたものであります。昭和56年11月以降11次の調査が実施され、縄文時代から歴史時代（江戸時代）に至る複合遺跡であることが判明し、数々の成果を得ることができました。

今回報告いたします神並遺跡第12次調査は、昭和63年３月８日から昭和63年３月16日まで実施したものであり、大部分が現在の水路により破壊されていましたが、奈良時代から江戸時代に至る遺物と自然河川と考えられる溝を検出することができました。

最後に、調査の実施および報告書作成にあたって御協力、御指導をいただいた方々、関係諸機関に厚くお礼を申し上げますとともに、本書が広く活用されることを心から願うものであります。

昭和63年３月

財団法人　東大阪市文化財協会
理事長　　木寺　宏

例　　言

1.　本書は、東大阪市西石切町１丁目18～45番地で行われた公共下水道第32工区管きょ築造工事に伴う神並遺跡第12次発掘調査報告書である。

2.　本調査は、財団法人東大阪市文化財協会が、東大阪市長北川謙次の委託を受けて実施した。

3.　現地調査は、昭和63年３月８日より昭和63年３月16日まで実施した。

4.　事務局の体制は以下のとおりである。（昭和63年３月）

理　事　長　木寺　宏（東大阪市教育委員会教育長）
事務局長　寺澤　勝（東大阪市教育委員会社会教育部参事）
調査部長　原田　修（東大阪市教育委員会文化財課主査）
庶務部長　下村晴文（東大阪市教育委員会文化財課主任）
調査副部長　福永信雄（東大阪市教育委員会文化財課）
調査副部長　芋本隆裕（東大阪市教育委員会文化財課）
庶　務　部　安藤紀子（東大阪市教育委員会文化財課）
調　査　部　上野節子（財団法人東大阪市文化財協会）
調査担当　勝田邦夫（東大阪市教育委員会文化財課）
調査担当　吉村博恵（東大阪市教育委員会文化財課）

現場調査、整理調査に従事した調査補助員

辻本智英　長岡　智

5.　現地の土色の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修の新版『標準土色帖』に準じており、記号の表示もそれにしたがった。

6.　本書の執筆および編集は勝田がおこなった。

7.　図版に収めた遺構写真は勝田、吉村が撮影し、遺物の撮影は日本アートふれいむへ委託して実施した。

8.　調査の実施にあたっては、東大阪市建設局下水道部河川課、川村組の御協力をいただいた。記してお礼申し上げます。

本　文　目　次

はしがき
例言
1.　調査に至る経過……1
2.　位置と環境……2
3.　調査の概要……4
4.　出土遺物……6
5.　まとめ……7

挿　図　目　次

第１図　遺跡周辺図……3
第２図　調査地点位置図……4
第３図　土層断面図……5
第４図　遺物実測図……7

図　版　目　次

図版一　調査地航空写真
図版二　遺構　1.　調査風景
　　2.　第１トレンチ西側断面
図版三　遺構　1.　第２トレンチ西側断面
　　2.　第２トレンチ西側断面
図版四　遺物　1.　須恵器・瓦器
　　2.　土師器・陶器・磁器・土人形

1. 調査に至る経過

神並遺跡は、東大阪市東石切町１丁目、西石切町１丁目に所在する縄文時代から歴史時代(江戸時代）にかけての複合遺跡である。本遺跡は、大阪と奈良を結ぶ都市高速鉄道（現在の近鉄東大阪線）の建設工事及び国道308号線の建設工事予定地内における試掘調査の結果、存在が確認された。昭和56年11月以降11次の調査が実施され、遺跡の範囲は東西約500ｍ、南北約350ｍに及ぶことが明らかになった。

１、２次調査[注1]では縄文時代早期の集石遺構、飛鳥時代～奈良時代の羽釜棺、平安時代末～鎌倉時代の建物、井戸、溝、土坑が検出された。集石遺構は、調査地の中央部で約10㎡の範囲で西北から南東方向に楕円状に広がっており、中から楕円文、山形文などを施した押型文土器、有舌尖頭器、尖頭器、石鏃といった石器類が出土した。２次調査地の北端で自然河川の左岸を確認している。自然河川は、５、８、９次調査でも検出されており、５次調査地では上部幅14ｍ、下部幅６ｍ、深さ４ｍの規模で南西方向に走っていた。この河川の右岸には、古墳時代中期と奈良時代の掘立柱建物からなる集落が広がっているが、平安時代末～鎌倉時代の集落は確認されていない。左岸以東では、平安時代末～鎌倉時代の集落が広がっている。

３、４次調査[注2]では古墳時代の溝、掘立柱建物、奈良時代～平安時代の溝、柵、掘立柱建物が検出された。

５、６次調査[注3]では古墳時代の掘立柱建物、土坑、奈良時代の掘立柱建物、倉庫、井戸、鎌倉時代のスキ跡、江戸時代の井戸、古墳時代から室町時代までの自然河川が検出された。

７次調査では奈良時代の溝、鎌倉時代から室町時代の溝、土坑、井戸が検出された。

８、９次調査では古墳時代の埋積谷、江戸時代の河川、耕作跡が検出された。

10次調査は今回の調査地点の東約80ｍにあり、平安時代と思われる掘立柱建物、江戸時代～近代の耕作痕(スキ跡)が検出された。

11次調査では縄文時代の集石土坑、平安時代の掘立柱建物、土坑、溝が検出された。

今回の調査は、８次調査地点の北側で公共下水道第32工区管きょ築造工事が約160ｍにわたって計画された。これは径800～700㎜の管を深さ約1.8～2.5ｍに設置する工事である。遺跡内での土木工事であり、埋蔵文化財への影響が考えられるため、東大阪市教育委員会が事前の試掘調査を実施した。２か所実施した中で北側地点にあたる所の第３、４層で土師器が出土し奈良時代の包含層、遺構が存在する可能性が考えられた。このため工事に先だって発掘調査が必要となり、財団法人東大阪市文化財協会が受託し実施することになった。

注１　下村晴文、才原金弘、曽我恭子『神並遺跡Ⅰ』東大阪市教育委員会　財団法人東大阪市文化財協会　1986
　　下村晴文、菅原章太他『神並遺跡Ⅱ』東大阪市教育委員会　財団法人東大阪市文化財協会　1987
注２　松田順一郎、中西克宏『神並遺跡Ⅲ』東大阪市教育委員会　財団法人東大阪市文化財協会　1988
注３　西口陽一、宮崎泰史『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査概要Ⅰ』大阪府教育委員会　1984
　　西口陽一、宮崎泰史『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査概要Ⅲ』大阪府教育委員会　1986

2. 位置と環境

神並遺跡は、東大阪市東石切町1丁目、西石切町1丁目に所在する縄文時代から歴史時代(江戸時代）にかけての複合遺跡である。

本遺跡の立地は、生駒山西麓に発達する中位段丘上にあり、標高は16～45ｍである。遺跡内には生駒山から流れ出る幾筋もの谷川が流れているが、これらの谷川は、縄文時代以降流路を埋め、地点を変えながら現在まで続き、今の地形を形成していることが調査により明らかになってきた。

神並遺跡の周辺地域で生活が開始されたのは旧石器時代で、日下、芝坊主山、千手寺山、正興寺山、山畑の遺跡がある。いずれの遺跡もナイフ形石器及び尖頭器の出土であり、日下、芝坊主山、千手寺山が縦長剝片を、正興寺山、山畑が横剝ぎの剝片を素材としている。旧石器時代から縄文時代への過渡期の晩期旧石器時代または中石器時代と呼ばれる時期には、近畿地方では有舌尖頭器が盛行する。神並遺跡では６個出土しており、それ以外でも草香山、日下、六万寺町で出土している。

縄文時代では、早期の神並遺跡、中期の善根寺遺跡、後期の日下、縄手遺跡、晩期の日下、芝ヵ丘、鬼塚、馬場川遺跡がある。これらの遺跡は、生駒山西麓の扇状地上、標高15～80ｍに位置する。神並遺跡では、11次調査地点から１次調査地点にかけて、ネガテイブ楕円文を中心に山形文、撚糸文、刺突文といった押型文土器、有舌尖頭器、尖頭器、石鏃、石錐、削器、掻器、石匙、楔形石器、敲石、磨石、砥石といった石器類、土偶が出土している。１次調査地点では集石遺構、11次調査地点では、壁面が赤色化した焼土坑３基、人頭大～拳大の礫を配した集石土坑１基、土坑８基を検出している。

弥生時代では、中垣内、和泉、鬼虎川、高井田、瓜生堂、山賀、久宝寺といった標高１～10ｍの低地を中心に集落が営まれる。鬼虎川遺跡では、幅５ｍ、深さ２ｍの環濠に囲まれた集落、方形周溝墓、土坑墓、木棺墓といった墓地、水田などが発見された。また本遺跡に西接する西ノ辻遺跡でも方形周溝墓を中心に壺棺、甕棺といった墓地が発見されている。

古墳時代では、馬場、日下、芝ヵ丘、辻子谷、神並、西ノ辻、鬼虎川、鬼塚、縄手遺跡といった扇状地、新家、西岩田、意岐部、西堤、岩田、瓜生堂、小若江、池島東遺跡といった沖積平野で集落が営まれる。神並遺跡では、３～５次調査地点で古墳時代中期後半～末の掘立柱建物、落ち込み(製鉄関連遺構)、導水施設、溝、土坑を検出している。

歴史時代では、芝ヵ丘、神並、西ノ辻、植附、岩滝山、水走、西堤、若江、小若江、弥刀といったところで集落がみられる。神並遺跡では、奈良時代初頭に１次調査地点が一時期墓域となったようで羽釜棺２基を検出している。奈良時代後期から平安時代前期頃になると３、５、６、10、11次調査地点で掘立柱建物、倉庫、井戸、土坑、溝などが検出され居住区であったようである。鎌倉時代～室町時代には多くの建物が出現し、1、2、4、7次と遺跡の東端部を中心に居住の様子がうかがわれる。江戸時代～近代にかけては耕作地であったようである。

1．中垣内遺跡
2．善根寺遺跡
3．草香山遺跡
4．日下遺跡
5．馬場遺跡
6．芝ヶ丘遺跡
7．和泉遺跡
8．芝坊主山遺跡
9．辻子谷遺跡
10．千手寺山遺跡
11．法通寺跡
12．植附遺跡
13．正興寺山遺跡
14．神並遺跡
15．西ノ辻遺跡
16．鬼虎川遺跡
17．水走遺跡
18．鬼塚遺跡
19．山畑遺跡
20．市尻遺跡
21．縄手遺跡
22．岩滝山遺跡
23．馬場川遺跡
24．池島東遺跡
25．稲葉遺跡
26．新家遺跡
27．意岐部遺跡
28．西岩田遺跡
29．岩田遺跡
30．瓜生堂遺跡
31．若江遺跡
32．巨摩廃寺遺跡
33．若江北遺跡
34．上小阪遺跡
35．山賀遺跡
36．小若江遺跡
37．弥刀遺跡
38．友井東遺跡
39．美園遺跡
40．久宝寺遺跡
41．高井田遺跡

第１図　遺跡周辺図

3.　調査の概要

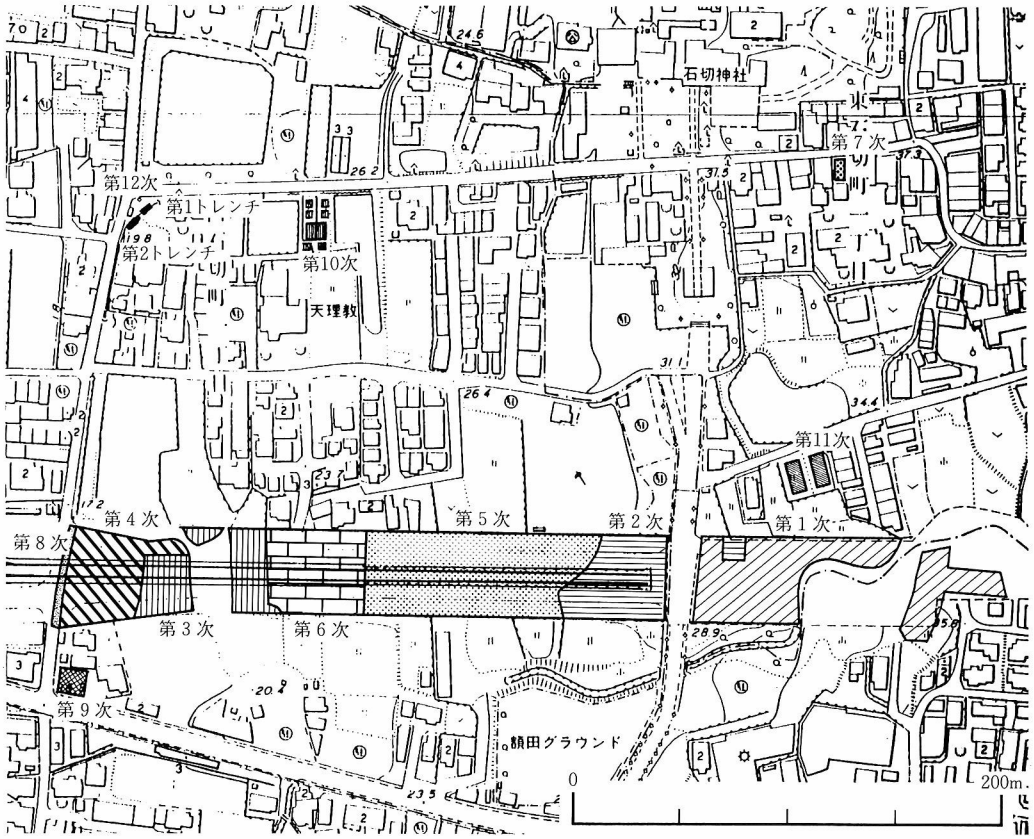
今回の調査地は、遺跡の北西端にあたるところであり、既存の調査などから奈良時代から平安時代前半の遺構、鎌倉時代から室町時代の遺構が検出されると予想された。調査は地表下0.9～1.5mまで機械掘削し、以下は人力により層を追って掘削、調査した。ただ、管きょ築造工事予定地内の大部分が水路敷にあたっていること、調査地内に大きな木が植っておりその根が地山面まで達し攪乱されていたことなどから十分な成果を上げることができなかった。遺物としては古墳時代の須恵器杯片、奈良時代の須恵器、土師器、鎌倉時代の瓦器、土師器、陶器、江戸時代の陶磁器といった土器類、土製品、瓦がある。

1.　層位

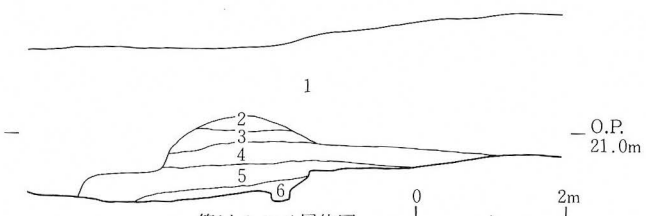
北側調査地(第1トレンチ)、南側調査地(第2トレンチ)で層位が全く異なるのでそれぞれのを記載する。

第1トレンチ

第1層　盛土、腐植土、木の根による攪乱層。現代のものである。

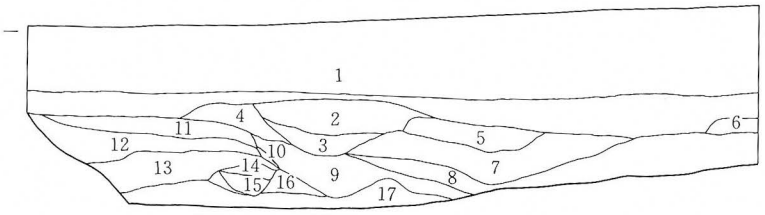


第2図　調査地点位置図



第1トレンチ層位図

1. 盛土
2. 暗褐色粗～中粗砂混り砂質シルト 10YR3/4
3. 暗褐色細礫混りシルト 10YR3/2
4. 黒褐色細礫混り砂質シルト 2.5Y3/2
5. 黒色細礫～粗砂混りシルト 2.5GY2/1
6. オリーブ黒色細礫混りシルト 7.5Y3/2



第2トレンチ層位図

1. 攪乱層
2. 暗緑灰色中粒砂～粗砂 10GY4/1
3. オリーブ黒色中粒砂～粗砂混り粘質シルト 5GY2/1
4. オリーブ黒色砂質シルト 10Y3/1
5. オリーブ黒色粘質シルト 7.5Y3/2
6. 黒色細砂混り粘質シルト 7.5Y3/1
7. 黒色粘質シルト 7.5Y2/1
8. 緑黒色砂質シルト 10GY2/1
9. 黒色砂質シルト 10Y2/1
10. オリーブ黒色粗～細粒砂 5Y3/2
11. 暗緑灰色シルト 5G4/1
12. 緑黒色砂質シルト 7.5GY2/1
13. 暗緑灰色シルト 10G4/1
14. 暗緑灰色砂質シルト 10GY3/1
15. 暗青灰色粗～中粒砂 5BG3/1
16. 暗青灰色シルト 10BG4/1
17. 暗青灰色細粒砂 5BG4/1

第3図　土層断面図

第2層　暗褐色粗～中粒砂混り砂質シルト　　第3層　暗褐色細礫混りシルト

第4層　黒褐色細礫混り砂質シルト　　第5層　黒色細礫～粗砂混りシルト

第6層　オリーブ黒色細礫混りシルト

第2トレンチ

第1層　コンクリート及び現代の攪乱層

第2層　暗緑灰色中粒砂～粗砂　暗青灰色シルトのブロックを多く含む。

第3層　オリーブ黒色中粒砂～粗砂混り粘質シルト　暗緑灰色シルトのブロックを多く含む。

第4層　オリーブ黒色砂質シルト　　第5層　オリーブ黒色粘質シルト

第6層　黒色細砂混り粘質シルト　　第7層　黒色粘質シルト

第8層　緑黒色中粒～細粒砂

第9層　黒色砂質シルト　暗緑灰色シルトのブロックを多く含む。

第10層　オリーブ黒色粗～細粒砂　　第11層　暗緑灰色シルト

第12層　緑黒色砂質シルト　　第13層　暗緑灰色シルト

第14層　暗緑灰色砂質シルト　　第15層　暗青灰色粗～中粒砂

第16層　暗青灰色シルト　　第17層　暗青灰色細粒砂

自然河川

第2トレンチで江戸時代後半以降に埋没したと考えられる川を検出した。地山層が検出されておらず砂層、砂質及び粘質シルトがさらに下層に続いていることなどから、もとの川幅はかなり広いものであったものと思われる。上層からは古墳時代の須恵器、土師器、奈良時代～鎌倉時代の土師器、瓦器、須恵器、江戸時代の陶磁器、中～下層から須恵器、土師器、瓦器、唐

津焼、伊万里焼、常滑焼などの陶磁器が出土した。これらの出土遺物から堆積土は江戸時代後半以降のものであり、下層にはより古い時期の堆積層が続いていると考えられる。流路の方向は南東から北西である。

4. 出土遺物

今回の調査では、須恵器、土師器、瓦器、陶器、磁器、土製品、瓦などが出土した。出土遺物のほとんどが自然河川からの出土である。

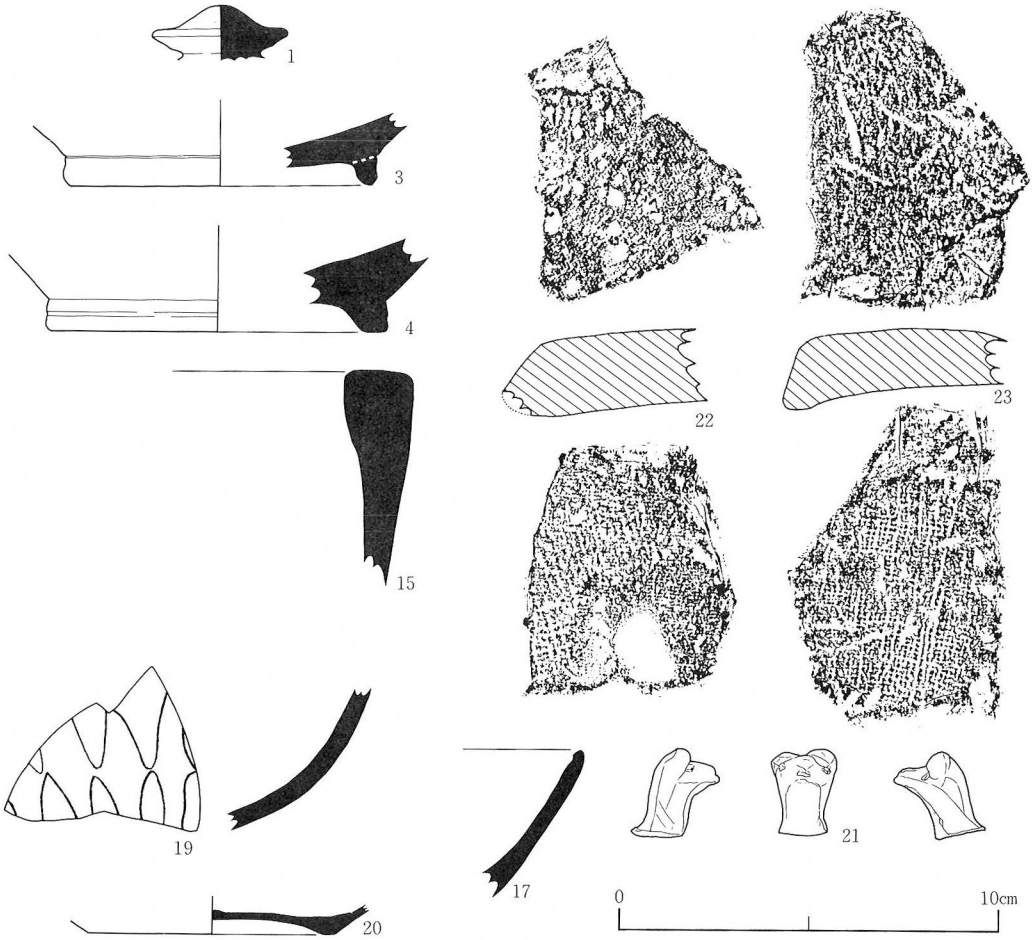
須恵器　杯、壺底部、甕体部がある。1は杯蓋の宝珠つまみである。やや扁平で上面、下面をていねいにヨコナデする。形態から陶邑のMT21型式のものと思われる。2は杯蓋の天井部の破片である。外面はヘラケズリ、内面はナデによる調整である。胎土に長石、石英の細粒を含む。3は杯の高台部である。高台は体部の直下に、垂直よりもやや外方に張る短いものである。内外面ともヨコナデによる調整である。胎土に石英、長石をわずかに含む。4は壺または瓶の高台部である。内外面ともヨコナデによる調整である。高台部外面には灰釉が付着する。5～7は甕の体部である。5は外面に1.2～1.5㎜幅の細かい格子ふうの平行タタキメ文、内面に同心円文をもつ。6は外面に3.5～4.0㎜幅の粗い格子ふうの平行タタキメ文をもつ。内面はヨコナデ調整である。7は外面に2.5㎜幅の格子ふうの平行タタキメ文、内面に同心円文をもつ。

土師器　杯、羽釜がある。8は杯である。外傾する口縁部と平らな底部からなるものであろう。口縁端部は内側に巻き込む。表面の磨耗が著しいため調整は不明。胎土には長石、石英の微粒を多く含む。9は羽釜の鍔部である。幅広の鍔で頸部から水平よりやや斜め下に丸みをもって貼りつけられたものである。接合部分はヨコナデ調整であるがそれ以外は調整がなく指頭圧痕がみられる。生駒山西麓の胎土で石英、長石、角閃石、金雲母といった有色鉱物を多量に含む。煤はみられない。10は羽釜である。内傾する頸部から強く「く」字形に屈折する口縁部となり、その端部を内側に折り曲げて突帯状を呈するものである。14世紀代の大和型の羽釜と考えられる。胎土には石英、長石の細粒を多く含む。

瓦器　椀と火舎がある。11～14は椀の破片である。磨耗が著しく暗文がわからないが器壁の厚さなどから12～13世紀代のものと考えられる。15は火舎口縁部である。体部は垂直近く立ち上がる。口縁端部は内側に肥厚し、上端に面をもつ。内外面ともにヨコナデ調整を施す。

陶磁器　常滑焼、唐津焼、伊万里焼がある。16は常滑焼の破片である。17、18は唐津焼椀である。17は分厚な底部から、体部は内弯ぎみに立ち上がり、口縁部は薄く端部は内方に傾斜する。18の外面露胎部にヘラケズリの痕跡がみられる。胎土には0.1～0.5㎜大の長石を含む。19は伊万里焼椀である。体部は内弯ぎみに立ち上がる。外面は網目文を施す。20の産地は不明である。器壁の薄い皿である。底部内面中央をヘラでケズリとっている。底部畳付周辺と底部外面は露胎のままである。

土人形　土製の人形で、いわゆる伏見人形と思われる。手づくねによるもので犬をかたどっている。耳は粘土を貼りつけている。ヘラで成形したあとナデにより仕上げをしているが、指



第４図　遺物実測図

紋もめだつ。目や鼻は、細い棒状のものを突き刺したり、押えたりして表現している。

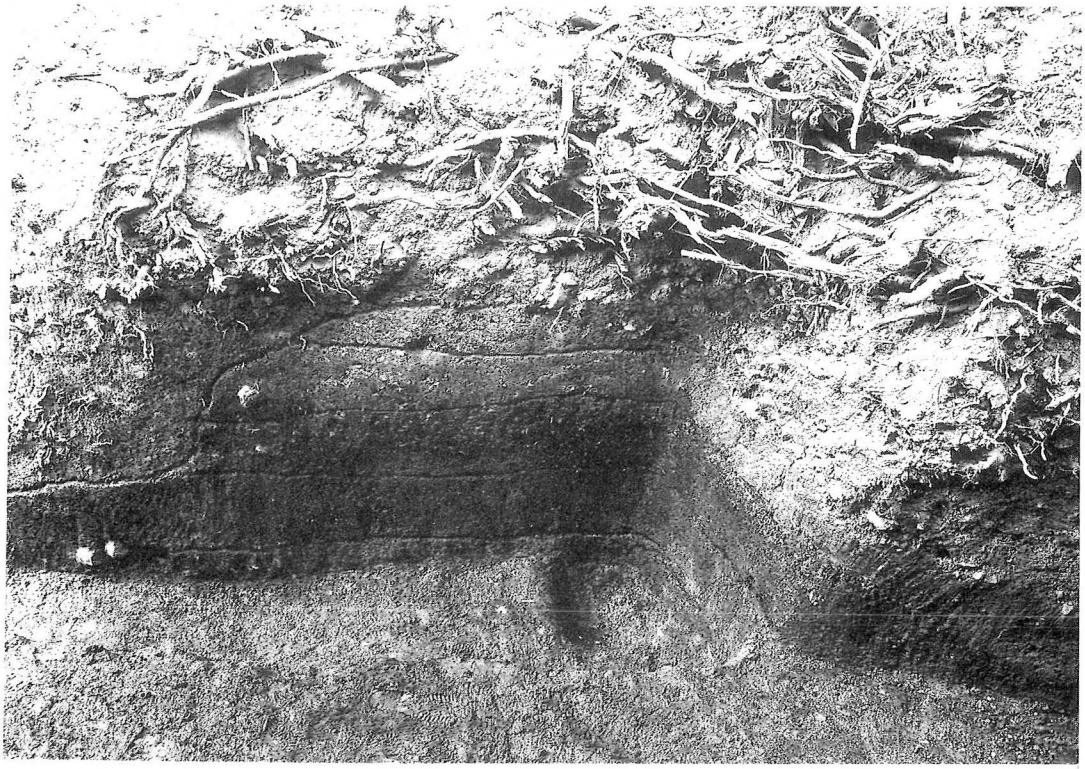
瓦　平瓦が２点出土した。凸面にはかすかに縄目を残し、凹面には割合細かな布目を残す。胎土には細かな砂や小石を含む。焼成はやや軟質である。

5.　まとめ

今回の調査では、調査予定地内の大部分が水路敷にあたっていて、また調査可能なところも大木の根や後世の削平などをうけて本来の遺構面が失なわれていた。第２トレンチで江戸時代後半以降、完全に埋没した自然河川を検出した。調査したのは江戸時代以降に埋没した部分だけであるがそれ以前に堆積した土層が下層に続いているため、時期は明確ではないが古くから流路があったと考えられる。調査した河川の堆積土からは古墳時代の須恵器、土師器、奈良時代～鎌倉時代の土師器、瓦器、須恵器、江戸時代の陶磁器が出土し、東側に存在した古墳時代～鎌倉時代の包含層あるいは遺構面を削りながら流れていたものと考えられる。

図版一　調査地航空写真

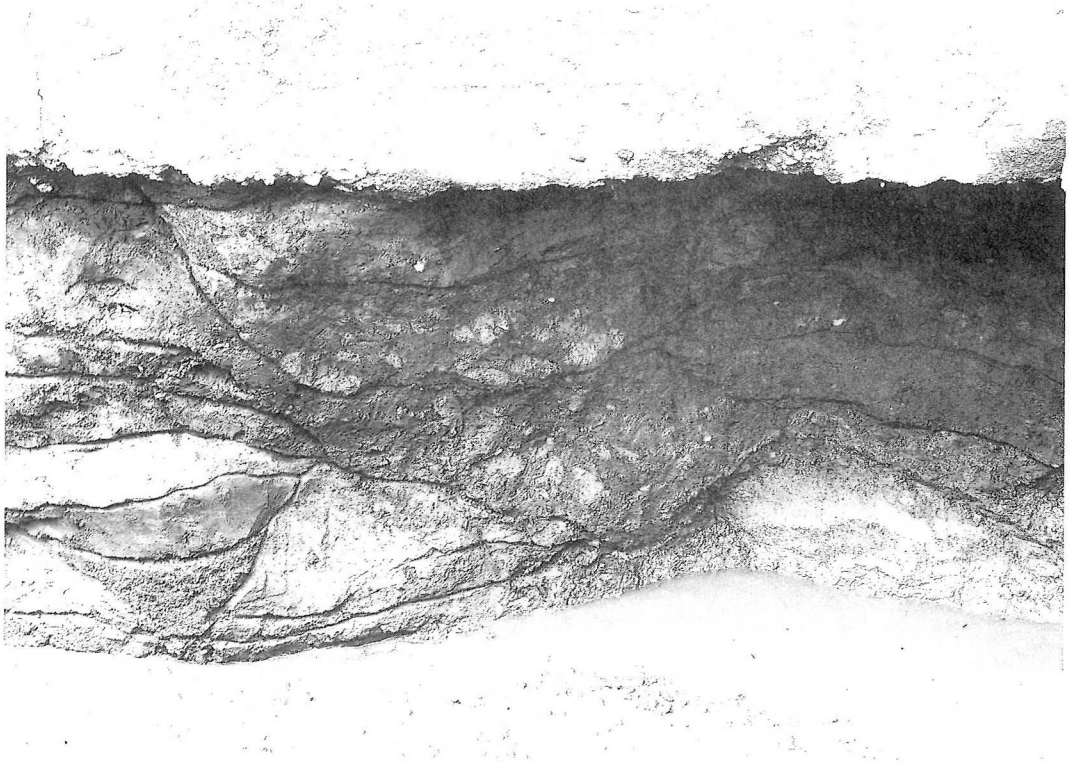
1．調査風景



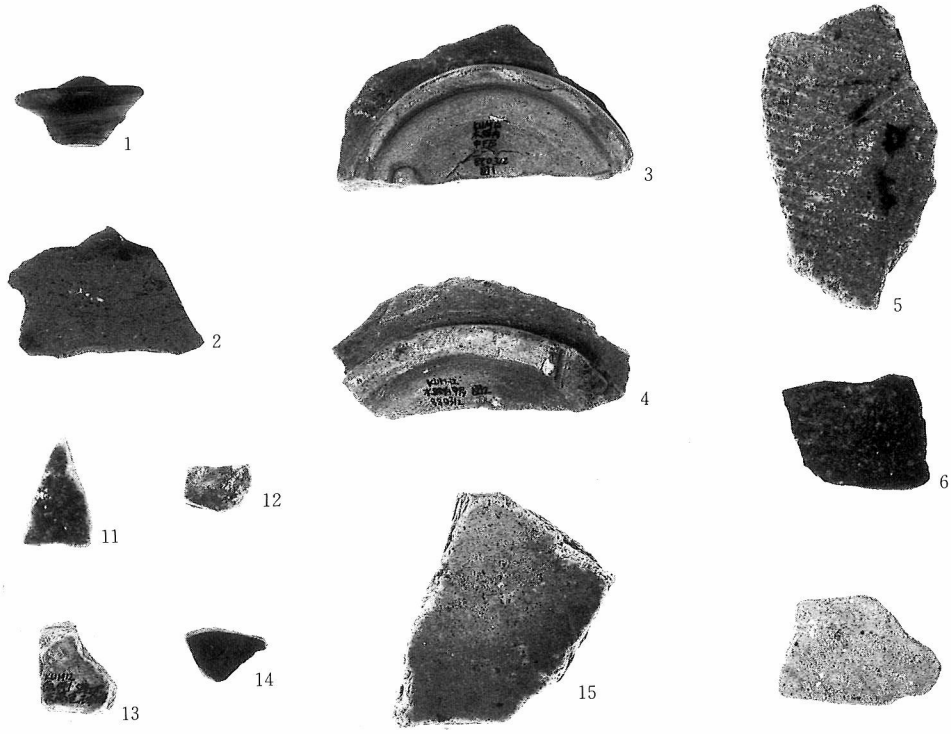
2．第1トレンチ西側断面

図版三　遺構

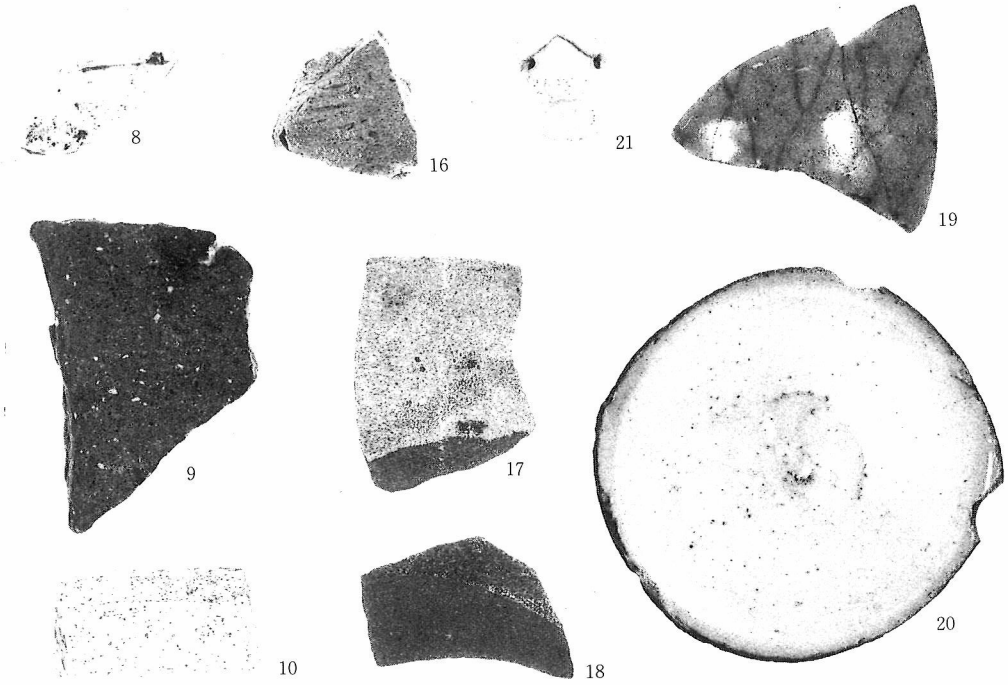
1．第２トレンチ西側断面



2．第２トレンチ西側断面



1．須恵器・瓦器



2．土師器・陶器・磁器・土人形

神並遺跡第12次発掘調査概報

昭和６３年３月３１日

発行所　財団法人東大阪市文化財協会

印刷所　明文堂工業株式会社